

平成21年（ワ）第24208号 出版妨害禁止等請求事件

原告 荒井 晴彦 外1名

被告 絲山 秋子 こと 西平 秋子

原告準備書面（1）

2009年12月21日

東京地方裁判所民事第40部3A係 御中

原告訴訟代理人弁護士 柳 原 敏 夫

目 次

第1、はじめに	1 頁
第2、基本的な事実関係の整理	2 頁
第3、被告の拒否理由について	8 頁
第4、本但書の法律的意味について	13 頁
別紙	

被告準備書面(1)及び同準備書面（2）に対する認否・反論は以下の通りである。

第1、はじめに

1、脚色の本質について

日本の近代批評の草分けである文芸評論家小林秀雄は、他人の作品を論評する「批評」の本質についてこう喝破した――批評するとは自己を語ることである。他人の作品をダシに使って自己を語ることである（1930年「アシルと亀の子Ⅱ」）。この点、同様に他人の作品を原作にして脚本を執筆する「脚色」の場合もその本質は批評と似ている。結局のところ、脚色もまた自己を語ることである、他人の作品をダシに使って自己を語ることであるからである。

言い換えれば、脚色の本質とは、他人の原作をダシに使って、脚本家の創作性を発揮することである。従って、この本質的な意味からいえば、「原作の忠実な再現」ということは脚色にはあり得ない。なぜなら、脚色の本質が「脚本家の創作性を発揮すること」、つまり、そこに新たに脚本家独自の創作性が加味される以上、「原作の忠実な再現」というのは原理的に矛盾だからである。

すぐれた表現者は皆この本質を理解している。それゆえ、彼らは、同じ表現者として、脚本家の脚色によって新たに加味された脚本家の独自の創造性を尊重することも理解している。表現の自由を尊重するとは、己の表現の自由のみならず、他人の表現の自由をもひとしく尊重することだからである。

2、脚本家たちの反発の本質について

しかるに、被告はこの理を全く理解していないのではないか——これが原告荒井のみならず、原告社団法人シナリオ作家協会（以下、原告協会という）の会員である多くの脚本家たちが、被告の本件拒否（本脚本を年鑑代表へ収録・出版することの拒否）を聞いたときの偽らざる感想である。

なぜなら、被告は、原告の許諾申請に対し《「原作者としては、あのシナリオを活字として残したくない」という、強いご意志を示しておられます。》（乙7）と拒否理由を明らかにしたからである。ここには、本脚本が、二次的著作物として新たに加味された脚本家の独自の創造性と独自の芸術的価値を有し、それゆえ原作の表現の自由と同様に、脚本も表現の自由を有することが一顧だにされておらず、あたかも新たな創造性など何も付け加わず、それゆえ独自の芸術的価値も独自の表現の自由もないただの機械的複製（コピー）でしかなく、そんな無価値なものを生かすも殺すも自分の腹ひとつであるかのような見下した態度が如実に表明されているからである¹。

しかるに、被告は、原告両名から拒否理由を明らかにすることを求める質問状（甲10）が出されると、一転して、貝のように固く口を閉ざした。

それゆえ、原告両名は拒否理由に関する被告の沈黙と無視の態度に一層不信感を深め提訴を余儀なくされたが、それゆえ、今回、拒否理由に関する被告の正式な主張に多いに注目した次第である。

但し、その問題に入る前に、まず、本件紛争の基本的な事実関係について原告の主張を整理しておく。

第2、基本的な事実関係の整理

1、脚本の基本的な流れ

もともと脚本は小説と異なり、直しがあるのが前提になっており、本件でも

¹ それゆえ、被告の著作権管理窓口をつとめた株式会社文藝春秋（以下、訴外文春という）の担当者（田中光子氏）でさえも、2007年9月の時点で原告が本脚本の年鑑代表掲載を見送ったことに対して「前例のない事態にもかかわらず、原作者の意思を尊重する決定をくだしていただき、ありがとうございました」（甲15。アンダーラインは原告による）と表明したのである。

原告荒井の元に5種類の脚本が残っている（最初の執筆は2004年3月21日。甲20荒井陳述書(2)）が、このうち被告に渡された脚本など重要なものに絞ってその流れを確認すると以下の通りである。

①. 甲12。準備稿（被告主張の「第一稿」）

訴外スチューディオ スリーの記録によれば、2004年5月28日に印刷された「準備稿」と表示された脚本で、これがその後被告に渡された「第一稿」である（訴外文春の担当者も乙3の本文1行目で「準備稿」と述べている）。

②. 甲1（被告主張の「第二稿」）

訴外スチューディオ スリーの記録によれば、2004年10月20日に印刷された脚本で、これがその後被告に渡された第二稿である。

③. 甲13

訴外スチューディオ スリーの記録によれば、2004年11月16日に印刷された脚本で、甲1にスタッフとキャストの名前が入ったもの。

④. 決定稿、すなわち撮影稿

2004年11月7日の被告・廣木監督会談の結果を踏まえて、原告荒井が③の甲13に手書きで直した「差し込み稿」（厳密には「書き込み稿」といった方が正しい）で、これを元に本映画を撮影した（甲20荒井陳述書(2)）。

⑤. 乙10。シナリオ誌掲載稿

2006年6月の本映画一般公開に先だち、本映画宣伝の一環として雑誌「シナリオ」2006年7月号に掲載された脚本で、④の決定稿とほぼ同じものである（甲20荒井陳述書(2)）。

2、各脚本の直しの概要

次に、以上の各脚本でいかなる直しがあったか、その概要は以下の通りである。

①. 甲12。準備稿（被告主張の「第一稿」）

これに対し、被告より次の注文があった（乙3のFAX）。

- (1)、ラストの音楽問題
- (2)、主人公の方言問題
- (3)、被告の個人情報問題

なお、被告による注文は、その後、脚本完成まで2回あり（10月20日・11月7日）、その経過を被告準備書面(1)の主張に基いて一覧表にしたので、これを別紙として添付する。

②. 甲1（被告主張の「第二稿」）

上記注文に対し、次の直しを行った（甲２０ 荒井陳述書(2)）。

(1)、ラストの音楽問題：音楽の指定、削除。

(2)、主人公の方言問題：一部修正

(3)、被告の個人情報問題：修正

③. 甲１３

上記３点の注文について甲１のままであり、それ以外の主な修正点は以下の通りである（甲２０ 荒井陳述書(2)）。

シーン 37 柱が「ファミレス」→「車の中」

シーン 40 祥一のセリフ変更

シーン 41 祥一のセリフ変更

シーン 44 祥一のセリフ変更

シーン 45 祥一のセリフ変更

シーン 55 祥一のセリフ変更

シーン 58 シーンの追加

シーン 78 シーンの追加

④. 決定稿、すなわち撮影稿

上記３点の注文について、次の通り修正した（甲２０ 荒井陳述書(2)）。

(1)、ラストの音楽問題：被告の指定する曲は使用料が高いため使えないという廣木監督の説明を被告は了解。

(2)、主人公の方言問題：ラストのシーン 81 のみにする。

(3)、被告の個人情報問題：撮影の中で対処するという廣木監督の説明を被告は了解。

⑤. 乙１０。シナリオ誌掲載稿

次の点だけ修正した（甲２０ 荒井陳述書(2)）。

(1)、ラストの音楽問題：準備稿（甲１２）が復活。

3、本映画撮影に使用した脚本

以上から明らかであるが、本映画の撮影に使用した脚本は、原告荒井が甲１３に手書きで直した「差し込み稿」（厳密には「書き込み稿」）であり、現在、手許に残っていない。但し、その内容は乙１０のシナリオ誌掲載稿とほぼ同じである（甲２０ 荒井陳述書(2)）。

4、本脚本（撮影稿）と本映画とのちがい

一般に脚本と映画の関係は、原作と脚本の関係と同様、新たな創作性が加味

される二次的著作物であって、単なる複製物ではない。また、實際上、劇場公開に伴う上映時間（２時間を越えないことが求められる）の観点からも、撮影したフィルムのカットがなされるのが通常である（甲２０ 荒井陳述書(2)参照）。

その意味で、本脚本（撮影稿、すなわち原告荒井が甲１３に手書きで直した「差し込み稿」と本映画の間にちがいはあるのは当然である。

但し、被告が当初より注文を出していた以下の３点について、本脚本（撮影稿）と本映画の間にちがいはない。

- (1)、ラストの音楽問題：音楽の指定なし。
- (2)、主人公の方言問題：ラストのシーン 81 のみにする。
- (3)、被告の個人情報問題

他方、上映時間の関係で、本映画の編集により、本脚本（撮影稿）の以下の 14 箇所に基づいて撮影した映像部分をカットした（その中には、編集段階に至って被告が初めてリクエストしてきた「本間日の丸発言部分」（乙５。以下のシーン 19。72 行目）もある。甲２０ 荒井陳述書(2)）。

シーン	該当箇所
10	全て
11	同上
12	同上
13	同上
14	同上
16	同上
19	4 行目、優子「本間、ありがとう」……とメニューを見る。
同上	72 行目、優子「教育委員会」……本間「…中国のサッカー場でブーイングされる理由が分かんない奴ばかりになっちゃう」まで。
22	57 行目、優子、台所兼居間の灯りを消す。……優子、大きめの T シャツとスウェットパンツを出す。まで。
25	すべて
32	36 行目、優子「刑務所のご飯と違ってどうだったの？」……安田「俺、入院だけはまだしたことないんですよ、しなくちゃ」まで。
同上	59 行目、安田「胃は大丈夫ですか？」……優子「うん。で、副作用止めのピーゼットシー飲み始めたけど……」まで。
45	すべて
49	同上
71	2 行目、優子「ね、餃子食べたくない？ 東口に美味しいところあるの」
73	すべて
79	9 行目、優子「！？」 運転手があの安田昇だったような気がする。

それ以外の事実については、以下、時系列に述べる。

5、原作使用契約書の締結の時期

原告が訴状で、本原作使用契約の締結の時期を2003年9月と主張したのは、本原作使用契約書（乙4）の契約日としてそのように記載されていたからである。しかし、訴外森重に確認した結果、原作使用契約書の締結の時期は被告の主張通り、2004年11月中旬か下旬で間違いない。尤も、本原作使用契約書（乙4）の契約日として、著作権使用予約完結権契約書（乙2）の契約日と1日ちがいの2003年9月10日が記載されているのは、後に乙4が締結されたときにその効力が契約日まで遡及するという意味である（被告は、《誤って2003年9月11日》と表示》（9頁8行目）と主張するが、《誤って》と解すべき根拠はどこにもない）。

6、2004年11月7日被告・廣木面談に原告荒井の欠席の件

被告は《被告からの要求として、脚本家(原告荒井)がその場に出席するようにとの話があったので、田中はその旨を森重に伝えたところ、森重はわかったと答えた。》（8頁12～14行目）と主張するので、訴外森重に確認した結果、この事実に間違いない。

尤も、訴外森重はこの話を原告荒井には伝えなかった。その理由は、《こういう場合は直接当事者に面会すると得てして感情的にこじれる事態も予想される》（11頁22行目）と考えた訴外文春と同様であり、訴外森重自身の判断で原告荒井に伝えないことにしたのである。

7、「差し込み稿」の送付について

被告は、2004年11月7日被告・廣木面談の席上、廣木監督が被告に《言葉づかいについては脚本への「差し込み稿」を作成して被告に送るので確認してほしい》（8頁19～20行目）と述べたと主張するので、訴外森重に確認した結果、これで間違いない。

これを受けて、原告荒井は、11月16日印刷の脚本（甲13）に手書きで方言を直した「差し込み稿」（正確には「書き込み稿」）を作成し、訴外森重に渡した（甲20荒井陳述書(2)）。但し、訴外森重自身は、この「差し込み稿」を被告に渡したかどうかははっきり記憶にないということだった。

8、「本間の日の丸発言」について

被告は、《2005年1月7日、被告は田中を介して、脚本についてさらに問題

を指摘して改善を求めた。》（9頁 11～12 行目）と主張するので、訴外森重に確認した結果、そのような連絡はあったが、その際訴外森重に送られてきた乙5の書面によれば正確には次の通りである。《本映画の撮影終了後の2005年1月7日、訴外文春の田中は、編集作業の中で、シーン19の本間の日の丸発言についての削除を配慮していただくようお願いした。》

なお、訴外森重や廣木監督は、前記4で既述した通り、上映時間の関係で、本映画の編集により14箇所をカットした結果、「本間の日の丸発言部分」も含まれていた。

9、本映画の劇場公開時期

原告は訴状で、《2005年4月より本映画は劇場公開された。》（6頁2行目）と主張したが、これは具体的にはシンガポール国際映画祭で上映したという意味である²（甲11の年表参照）。これに対し、映画祭ではなく、一般の劇場公開の時期は、被告の主張する「2006年6月」（正確には、2006年6月10日）で間違いない。

10、海外セールスについて

原告は訴状で、《この時期、被告の許諾を得て、本映画の海外セールスを行なった。》（6頁6～7行目）と主張したが、訴外森重に確認した結果、《この時期、本映画の海外セールスを行なった》のは間違いないが、この段階ではまだ被告の許諾を得ていないということだったので、《被告の許諾を得て》の点は撤回する。

11、2007年8月の収録許諾申請書提出日時

原告は訴状で、2007年《翌8月6日、原告協会事務局長より訴外文藝春秋に対し、代案として、原作者名を外した形での本脚本の収録・出版の許諾を申請した》（6頁末行以下）と主張したが、「翌8月6日」は誤記で、正しくは被告主張の通り「8月13日」である。

12、2009年3月の質問状をめぐる訴外文春と訴外森重面談

被告は、2009年3月の質問状（甲10）をめぐる訴外文春と訴外森重面談（11

² 著作権法上、著作物が著作権者らにより上映の方法で公衆に提示された場合を「著作物の公表」と言うが（4条1項）、原告はそれに準ずる意味で、映画を映画祭で上映し、公

頁 10～17 行目) について、訴外森重に確認した結果、《文春から呼び出され、会ったとき、そういう説明を聞いた。それは意見交換の場であり、自分が荒井氏に伝えると約束はしていない。》という回答だった。

13、本脚本の雑誌「シナリオ」2006 年 7 月号への掲載について

本脚本を雑誌「シナリオ」2006 年 7 月号に掲載したことは事実である(乙 10)。その目的は、本映画の一般劇場公開(2006 年 6 月 10 日)に合わせ、広告宣伝の一環として掲載されたものである(乙 10 は 1 枚目の表紙右上に「毎月 3 日発売」と表示されている通り、発売は公開 1 週間前の同年 6 月 3 日である)。

このように、映画の一般劇場公開に合わせ、広告宣伝の一環として脚本を雑誌「シナリオ」に掲載することは、雑誌「シナリオ」が創刊された 1946 年当時から行われてきたものであり(甲 2 1 「シナリオ」第 2 号参照)、60 年以上の歴史があり、映画制作における確立した「一般的な社会慣行または商慣習」(民法 92 条の慣習)となっている。その際、広告宣伝の一環である以上、一方で映画製作会社に連絡し連携して実施するのは当然であるが、他方で映画製作会社からは原則として原作者に連絡することなく実施されている。こうしたやり方で、少なくとも原告荒井が脚本家としてやってきた 30 年間に、脚本の雑誌「シナリオ」掲載をめぐる原作者からクレームをつけられたトラブルは一度も聞いたことがない(甲 2 0 荒井陳述書(2))。尤も、民法 92 条により、原作使用契約の「広告宣伝のための使用」にこれと異なる扱いを定めた場合にはそれに従う。本原作使用契約書(乙 4)の「広告宣伝のための使用」にそのような特別な定めはなく(3 条 4 項参照)、従って、本件は、通常の広告宣伝の場合と同様、格別、被告に連絡することなく実施されたものである。

第 3、被告の拒否理由について

以上の事実関係の整理を踏まえ、次に本件紛争の核心部分の解明に入る。

1、問題の所在

本件紛争の中心的論点は、原告協会の本脚本の年鑑代表への収録・出版(以下、本出版という)の許諾申請に対する被告の拒否(以下、本拒否という)が「一般的な社会慣行並びに商習慣等に反する許諾拒否は行なわない」と定めた本原作使用契約第 3 条 5 項但書(以下、本但書という)に違反しないかどうかである。

衆に提示された場合も「劇場公開」と言ったのである。

これを判断するために、被告の本拒否がいかなる理由に基くものかを明らかにし（以下、本拒否理由という）、明らかにされた本拒否理由が本但書に違反しない正当な合理性があるものかどうかを検討する必要がある。

ところで、被告は、当初、原告の本出版の許諾申請に対し、被告は、『「原作者としては、あのシナリオを活字として残したくない」という、強いご意志を示しておられます。』と拒否理由を示していたが（乙7）、その後、原告より、本映画に対しては二次利用であるテレビ放送、DVD化（セル及びレンタル）を承諾しておきながら、なにゆえ同じ二次利用である本脚本の本出版だけを拒否するのか、それは本但書の「一般的な社会慣行並びに商習慣等に反する」のではないかとその拒否理由を明らかにすることを求められた途端（2009年3月。甲10）、貝のように口をつぐんでしまった。

今回、半年以上の沈黙ののちに開陳された被告の本拒否理由は、要約すれば——本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解決しなかったからである。

すなわち、本映画は、かなり不承不承ながらも被告の注文を入れて直してくれたので、映画化に承諾し、完成後のいわゆる二次利用であるテレビ放送、DVD化（セル及びレンタル）も承諾した。

しかし、本脚本は、被告の注文を入れて直してくれず、問題が解決されないままだったので、だから二次利用である本許諾申請を承諾しなかった（被告準備書面(1)4頁1～6行目）。

だから、これを理由に二次利用の許諾について映画と脚本とで正反対の結果となったことには正当性・合理性がある。従って、本拒否は一般的な社会慣行並びに商習慣等に反せず、本但書に違反しない、と。

そこで問題は、被告の上記拒否理由は果して本但書に違反しない正当な合理性があるものと評価できるかである。

2、検討1——結論——

結論として、被告の上記拒否理由は、以下に詳述する通り、その前提事実の不存在の点においても、また、その拒否理由本体の内容の点においても、被告側の訴外文春の態度の点においても一点の正当性、合理性も見出すことができず、むしろ動かざる事実から推定できる真実と思われる被告の本拒否理由を評価すれば、それが「一般的な社会慣行並びに商習慣等に反するもの」であることが明白である。

3、検討2——理由——

(1)、前提事実の不存在について

「本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解決しなかった」という主張が成立するためには、被告が、一方で完成した本映画を観たこと、他方で完成した本脚本（撮影のために使用した決定稿のことで、本件では前述した通り、原告荒井が甲13に手書きで直した「差し込み稿」を指す）を読んだことが大前提である。なぜなら、それで初めて「被告の注文を入れて直した」かどうか確認することができるからである。

しかし、被告は完成した本映画も観てなければ、撮影のために使用した決定稿も読んでいない。それは、被告側の訴外文春担当者の証言（甲14「絳山さんご自身は映画を観ない、……という態度を貫かれていたのです。」）と今回提出の被告準備書面3の主張（「監督から差し込み稿は送られてこなかった」1頁下から5行目）から明らかである。

つまり、被告は完成した本映画と本脚本をどちらも見ないで、「本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解決しなかった」と主張しているのである。このような主張が凡そ成立する余地がないことは火を見るより明らかである。

(2)、拒否理由本体の内容について（その1）

その上、完成した本映画と本脚本はいずれも被告の3点の注文（乙3）に関して、「被告の注文を入れて直した」か、廣木監督からの説明に被告が了解したことに沿って作られたものであり、この3点において本映画も本脚本もちがいはない。すなわち、第2、4（4～5頁）で前述した通り、被告の3点の注文「(1)、ラストの音楽問題。(2)、主人公の方言問題。(3)、被告の個人情報問題」（乙3）について、完成した本映画と本脚本にはちがいはない。

従って、本映画も本脚本も被告の注文を入れて直した点で同一であり、「本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解決しなかった」という被告主張は成立し得ない。

(3)、拒否理由本体の内容について（その2）

むしろ厳密に言うと、本映画こそ被告の注文を入れて完全には直しておらず、問題を残している。つまり、2004年11月7日の被告・廣木監督面談において、被告は、《映画エンディングのクレジットで……「原作」としてではなく「赫山秋子『イツ・オンリー・トーク』より」と表記すること》（8頁下から2行

目～9頁2行目)と注文を出し、了解されたにもかかわらず、本映画では実行されなかった(甲16)。にもかかわらず、被告は本映画の二次利用の申請に全て許諾した。

すなわち、被告の前記主張をこの事実在即して正しく言い換えると次のようになる。

「本映画は、被告の注文を入れて直さず、問題が解決しなかった、にもかかわらず二次利用であるテレビ放送、DVD化を承諾した。本脚本は、被告の注文を入れて直してくれた、にもかかわらず二次利用である本許諾申請を承諾しなかった」

本映画にはこれだけ寛大でありながら、本脚本に一転して無慈悲なほどに非寛容なこと——これが被告の振舞いである。しかし、どうしたらこれが契約の大原則である「信義誠実に行動せよ」として説明つくのか、原告代理人には想像がつかない。

(4)、拒否理由本体の内容について(その3)

以上に対し、被告から次の反論が予想される。

《被告の注文は3点の注文(乙3)以外にもある。それが「本間の日の丸発言」(シーン19)である。この点について、「本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解決しなかった」》

しかし、「本間の日の丸発言」は当初の、本脚本の第一稿(甲12。シーン18)から存在したシーンであったにもかかわらず、決定稿に至るまでの間、被告から注文が出されたことは一度もなかった。だから、本脚本も直しようがなかった。

その上、これが被告から「注文」というより「ご配慮のお願い」(乙5)として出されたのは、実に本映画の撮影も終了した後のことである。このとき、被告は既に2004年11月7日の被告・廣木監督面談において、クレジットで原作表示をやめ、「～より」に変更するように自ら申入れしていた。これは被告の小説(甲4)が本映画の原著作物という関係ではなく、いわば映画の素材、原案といった疎遠な関係であると自ら承認したものである。そうだとしたら、元々被告の小説(甲4)と本映画が疎遠な関係にしかないことを自ら承認した被告が、「本間の日の丸発言」について注文を要求する立場にはなく³、それゆえ、これを「本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解

³ 被告側も重々承知していたから、「ご配慮のお願い」(乙5)となったのである。

決しなかった」根拠に取り上げることが失当であることは明らかである。

以上から、もともと被告の「本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解決しなかった」という主張は、本映画の二次利用は無条件に許諾しておきながら、本脚本の二次利用だけは無条件に拒否した無節操な被告が本但書を突き付けられ、窮地に追い詰められた末に思い余って編み出した最終弁解とも言うものであり、その破綻は明白である。

(5)、訴外文春の態度について

しかもその破綻を最も熟知していたのは被告側の訴外文春である。訴外文春の担当者は、当初からくり返し、「小説世界と映画とは別物だ」（乙3本文4行目）「映画と原作とは別のものだ」（乙5本文14行目）、「やはり原作とは別物として受け止めておりました」（甲14本文下から5行目）を口にし、原作の忠実な再現を脚本・映画に求めることが間違いであること、原作の表現の自由を尊重するのと同様に脚本・映画の表現の自由を尊重することの大切さを理解していた。それゆえ、この点を理解できない被告の振舞いについて、「前例のない事態にもかかわらず、原作者の意思を尊重する決定をくださっていたき、ありがとうございました」（甲15。アンダーラインは原告による）と表明したのである。

(6)、被告の本拒否理由の真相について

最後に、では、いったい被告の本拒否理由の真相はなんであろうか。ここに1つの動かさざる事実がある。それは被告が、一方で、2004年11月7日の被告・廣木監督面談において原作表示を撤回する旨申入れし⁴、《出来上った作品についても、原作者として満足できない》（乙7. 本文8行目）と如実に不平不満を示しておきながら、他方で、被告小説（甲4）の単行本と文庫本の帯にデカデカと「映画化決定」と表示したことである（甲17・同18）。

もし真に《出来上った作品について》原作者として止み難い不満があるのなら、脚本のみならず映画にもひとしく距離を置き、ひとしく冷ややかに扱うのが首尾一貫する態度である。しかし、あれほど忌み嫌っていたにもかかわらず、

⁴ 《映画のタイトルを小説のタイトルから変更して、映画エンディングのクレジットで小説のタイトルを表記するときは文字の大きさを出来るだけ小さくし、かつ「原作」としてではなく「赫山秋子『イツ・オンリー・トーク』より」と表記すること、メディアからの映画に関する問い合わせ・インタビュー取材などは被告は一切受けないこと》（被告準備書面(1)8頁下から2行目～9頁3行目）

被告小説の帯に大きく「映画化決定」と表示したのは、たとえ不満があっても映画の利用については許諾しておけば、被告小説の帯の宣伝文句とあいまって、本映画を観た人たちが原作として被告小説を購入するチャンスが増え、小説の売上増に貢献する。これに対し、脚本の本出版については許諾しても、被告の小説の売上増には何も貢献しない。だから許諾する意義がない。本拒否理由の真相として、すなわち被告が許諾に関し本脚本と本映画とで正反対の態度を取った理由としてこれ以上説得力があるものはない。もしそうだとすると、これは我が身の利益追及のためには他人の犠牲を省みない徹底した自己中心的な態度であり、仮に本但書がなくとも、権利濫用（民法1条3項）に十分該当する背信的な振舞いである。

4、小括

以上から明らかな通り、「本映画は被告の注文を入れて直したが、本脚本はそうせず、問題が解決しなかった」という被告の上記拒否理由は一般的な社会慣行並びに商習慣等に反するものであることが明らかである。

従って、本出版の申請に対する被告の本拒否は本但書に違反する。

第4、本但書の法的意味について

1、問題の所在

最後に、「一般的な社会慣行並びに商習慣等に反する許諾拒否は行なわない」と定めた本原作使用契約第3条5項但書の法的意味について一言言及する。

なぜこれが問題かという点、被告が、本但書の法的意味について、要するに、信義誠実の原則または権利濫用の法理を単に確認しただけの念のための規定の意味しかないと主張し始めたからである（12～14頁）。そこで、本但書はあってもなくてもその契約関係が変わらないような念のための規定なのかどうか、念のため検討する。

2、検討

(1)、結論

結論として、本但書は信義誠実の原則または権利濫用の法理を確認しただけの念のための規定ではなく、本但書の挿入により上記の一般法理より、著作権者の許諾拒否がより制約されることになることになると解すべきである。

(2)、理由

今日、現代社会の最先端ビジネスの一端を担う知的財産権の分野の契約にお

いて、単に信義誠実の原則または権利濫用の法理を確認しただけの念のための規定をわざわざ挿入するなどという暢気な話は聞いたことがない。ましてや、契約書の前文や総則規定などではなく、本原作使用契約第3条の「許諾の条件」という原作使用契約の権利処理の中心となる規定において、わざわざ念のための規定を挿入するというのは、一体いかなる理由によるものか凡そ想像がつかない。また、もし被告の言う通りだとしたら、信義誠実の原則または権利濫用の法理はもともと契約関係をあまねく規律するものであるから、第3条5項但書に限らず、あらゆる条項にすべて但書として挿入されなければ首尾一貫しない。しかし、被告作成の本原作使用契約書（乙4）を見ても、そのような確認規定は第3条5項但書以外どこにも見出せない。

以上から、本但書が信義誠実の原則または権利濫用の法理を確認しただけの念のための規定ではないことは自明である。

なお、念のため、映画界における著作権契約の実情に通暁している映画プロデューサーの新藤次郎氏の陳述書（甲19）を提出する。これにより、本但書の存在意義が、《もしこのような但書が存在しない場合には、たとえ映画の著作権者の申入れが適正な額の著作権使用料であっても、原作者が許諾についてその気がなければ、自由に許諾拒否することができ》るのに対し、《これでは映画の二次利用の円滑な運用は実現できません。そこで、映画の二次利用の円滑な運用のために、上記のような但書を追加して、申入れの内容が「一般的な社会慣行並びに商習慣等に反する」ことがない限り、原作者は許諾を拒否できないとした》こと、つまり、《この但書が追加されたおかげで、それまでと比べ、契約処理上、二次利用の許諾が円滑に進むようになった》ことが明らかにされたであろう。

以 上